



TITLE:

Blended learning in a university EFL course(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Ishikawa, Yasushige

CITATION:

Ishikawa, Yasushige. Blended learning in a university EFL course. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19081>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	石川 保茂
論文題目	Blended learning in a university EFL course (EFL環境下における大学英語授業でのブレンド型学習)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、EFL環境下における大学の英語授業でのブレンド型学習について、独自のウェブ型コースウェアを開発し、その効果について調査、分析、記述した実証的研究である。全体は6章から構成されている。学生の授業外学習を推進・継続させるために、(1)学生の自己調整学習能力を育成する学習モジュールを組み込んだブレンド型学習環境としてのウェブ型コースウェアの開発、(2)授業外での教員によるe-メンタリングと授業内での学生と教員のコミュニケーションにより促される学生の自己評価と自己調整学習を推進する学生自己評価システムの開発、(3)開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合した反転授業のデザインとその実践について検討を行なっている。</p> <p>第1章では研究の動機について述べている。従来の研究の問題点を指摘した上で、本研究では授業外学習を推進・継続することに焦点を当て、EFL環境下におけるブレンド型学習について研究することとしている。</p> <p>第2章では、学生の自己調整学習能力を育成する学習モジュールを組み込んだブレンド型学習環境としてのウェブ型コースウェアの開発について検討している。先行研究から、ブレンド型学習の定義が定まっていないこと、従来実施されてきたブレンド型学習では、授業内及び授業外学習の最良のブレンドの検討がなされていないこと及びすべての学生がコンピュータ操作に関して熟達しているとは言えないということなどの問題点を指摘している。その上で、本研究におけるブレンド型学習を「ウェブ型コースウェアという1つの学習環境のなかで実現される授業内学習と授業外学習の融合」と定義し、上述の問題点の解決策の1つとして独自のウェブ型コースウェアを開発することを提案している。</p> <p>第3章では、授業外での教員によるe-メンタリングと授業内での学生と教員のコミュニケーションにより促される学生の自己評価と自己調整学習を推進する学生自己評価システムの開発について検討している。以下の3つのリサーチクエスチョン、(1)授業外学習用オンライン教材は継続して使用されたか、(2)学生の自己調整学習について、学生の態度、スキル及び行動パターンに関して注目すべき点はあったか、(3)学生自己評価システムにおける授業内での教員・学生間のコミュニケーションは授業外でのe-メンタリングにおける学生の満足度に寄与したか、を設定した上で、ブレンド型学習におけるe-メンタリングを概観し、学生の自己調整学習の推進・継続に効果的なe-メンタリングについて検討している。また、それらに基づいて学生による自己評価システムを開発したことが報告されている。開発したシステムを、6項目のカテゴリー並びにe-メンタリングに関する質問紙調査及びTOEICテストにより評価している。本システムを評価するために、同一の学生29名を対象にして本学生自己評価システムを利用することによって、学生の</p>			

英語力の改善がみられたことを報告している。TOEICテストスコア平均点が授業開始時の4月に比して授業終了時の翌年1月には大幅に上昇し、一般的に学生の学習意欲が低くなると言われる後期においても、有意な上昇がみられたことを報告している。

第4章では、開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合した反転授業のデザインとその実践について検討している。1つの授業が、(1)授業外事前学習、(2)授業内学習、(3)授業外事後学習という3つのフェーズから構成される反転授業のデザインを提案し、どのフェーズにおいても、開発したウェブ型コースウェアによる学習と学生自己評価システム利用による学習に関する学生の自己評価と教員からのアドバイスと激励のメッセージが実施されるようにした。開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合した反転授業のデザインとその実践について、学生の事後授業評価アンケート結果から、学生は、TOEICテストスコアの向上に役立った、自身の学習スタイルに適合していた、教員からのアドバイスと激励のメッセージに刺激され授業外学習を継続させることができた、と実感したことが明らかになったと報告している。その結果、本授業デザインは学生の学習スタイルに適合したものであると判断している。

第5章では今後の課題について、(1)開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合した反転授業デザインについて、実験・統制群を設定した仮説検証的な研究を進めたうえで、国内外の大学のEFL授業での試用を進め、本授業デザインの一般化を図ること、(2)学生の自己調整学習を促進する手法、特に授業内外における(e-)メンタリングの手法について、これまで一度も(e-)メンタリングを経験したことがない教員であっても(e-)メンタリングが可能になる方法と支援体制についての研究を進めることという2点について言及し、第6章では結論を述べている。

以上のように、本論文は、EFL環境下における大学英語授業でのブレンド型学習について、学生の授業外学習を推進・継続させるために、(1)学生の自己調整学習能力を育成する学習モジュールを組み込んだブレンド型学習環境としてのウェブ型コースウェアの開発、(2)授業外での教員によるe-メンタリングと授業内での学生と教員のコミュニケーションにより促される学生の自己評価と自己調整学習を推進する学生自己評価システムの開発、(3)開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合した反転授業のデザインとその実践に関する検討を行なった実証的研究であると総括することができる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、大学における英語教育の手法改善を目指した実証的研究であると位置づけることができる。ブレンド型学習は従来の対面型授業といわゆるeラーニングを併用して外国語学習の効果を高めようとするものであるが、実際には様々な問題点が指摘されている。本研究は、EFL（外国語としての英語教育）環境下における大学の英語授業でのブレンド型学習について、独自のウェブ型コースウェアを開発し、その効果について調査、分析、記述した実証的研究である。全体は6章から構成されている。

第1章は序論に相当し、本論文の学術的背景や研究の動機や目的について述べられている。第2章では、学生の自己調整学習能力を育成する学習モジュールを組み込んだブレンド型学習環境としてのウェブ型コースウェアの開発について検討している。第3章では、授業外での教員によるeメンタリングと授業内での学生と教員のコミュニケーションにより促される学生の自己評価と自己調整学習を推進する学生自己評価システムの開発について検討している。第4章では、開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合した反転授業のデザインとその実践について検討している。その結果、本授業デザインは学生の学習スタイルに適合したものであると判断している。第5章では今後の課題について言及し、第6章では結論を述べている。全体として、学生の授業外学習を推進・継続させるために、(1)学生の自己調整学習能力を育成する学習モジュールを組み込んだブレンド型学習環境としてのウェブ型コースウェアの開発、(2)授業外での教員によるeメンタリングと授業内での学生と教員のコミュニケーションにより促される学生の自己評価と自己調整学習を推進する学生自己評価システムの開発、(3)開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合した反転授業のデザインとその実践について検討を行なったものとして総括する事ができる。

EFL環境下における大学英語授業でのブレンド型学習について、本研究では多数の被験者を対象として継続的に調査を実施し、大規模なデータの収集と分析に成功しており、その成果を今後の我が国の英語教育の発展に反映することが期待される。学習者の学習意欲の減退を防ぎ、英語学習の効果を高めるための基礎的資料としての価値も高く評価できるものである。このような継続的なデータの収集と分析が可能になった背景には、申請者の現勤務先での多くの学習者の協力という好環境があり、それを十分に活かそうとする申請者の研究にかける積極的な姿勢も見逃すことはできない。

学生の授業内・授業外学習を推進・継続させるために、独自の1つの統一されたウェブ型コースウェアという学習環境を開発したこと、また、そのウェブ型コースウェアに学生の自己調整学習能力を育成する学習モジュールを組み込んだこと、さらに、学生の授業外学習を推進・継続させるために、学生自己評価システムを開発し、そのシステムを上記ウェブ型コースウェアに組み込んだこと等は本研究の独創的な側面として評価できるものである。

また、開発したウェブ型コースウェアを利用することにより、学生は、TOEICテストスコアを飛躍的に向上させることができた点、開発したウェブ型コースウェアのフレームワークは汎用性の高いものである点、開発したウェブ型コースウェアと学生自己評価システムを融合

した反転授業のデザインは、国内外の大学における英語教育・外国語教育の授業モデルとなる点等は本研究の英語教育上の意義として積極的に評価できるものである。その反面、その大量の分析データから得られた結果は、従来の少数のデータや演繹的に予測されていた知見と大きく異なる方向性が導き出された訳ではなく、いわゆる常識的な範囲内での結論に落ち着いている点是否めない。しかしながら、従来、慣習的にあるいは直感的に感じ取られていた外国語教育上の問題点に対して、オリジナルで質が高く、より客観的な数値データによる裏付けを与え、今後の英語教育の発展に大きく貢献するものと期待される点は高く評価できるものである。

言語の研究においては、新たな理論的枠組やモデルの提示、オリジナルな言語データの提供が望まれるが、本論文は、オリジナルな英語学習用のウェブ型コースウェアのモデル開発と、それを利用した調査資料の収集、及びそのデータの精密な観察・分析を実践したものであり、英語教育の手法改善の研究の発展への貢献において、高く評価できるものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認められる。また、平成27年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めたものである。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当面の間当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成27年3月24日以降